様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ２１１６１

研究課題名（和文）発達障害児の親の援助要請促進に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Enhancement factor of help-seeking in parents of children with developmental disorders

研究代表者
山根　隆宏（Yamane, Takahiro）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：６０６４４５２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，自閉症児の親が診断前や現在のインターネット上の情報やサポートをどのように利用しているかの実態を明らかにするとともに，インターネット上の情報やサポートの利用が親の援助要請や精神的健康にどのように影響を及ぼすかについて検討を行った。上記の目的のもと，検索エンジンを利用した調査や，自閉症児の親を対象としたオンライン調査，半構造化面接を行った。その結果，自閉症関連用語の検索状況や，多くの親がオンライン上の情報を得ている実態，検索行動がストレッサーの高低によって専門機関への援助要請に影響が変わること，援助要請を困難にする親の体験等が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Factors enhancing help-seeking behavior in parents of children with developmental disorders

This study aimed to investigate situations in which the parents of children with autism spectrum disorder access online information and support before the child's diagnosis and the present, and whether online information and support affect parents' help-seeking behavior and mental health. Surveys were conducted with parents of children with autism spectrum disorders and analyses utilized search engine data. The results showed that most parents searched online for information and supports about autism and developmental disorders before the child's diagnosis, and most parents regularly accessed online information and supports; online search behavior increased help-seeking behavior in parents experiencing higher parenting stress, and parent's experience made it difficult to engage in help-seeking behavior.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：自閉症　オンラインサポート　インターネット検索　援助要請　親　障害認識　障害受容　精神的健康

１．研究開始当初の背景

これまで発達障害に関しては家族支援の重要性が指摘されてきた。このことは発達障害児の親は強い育児ストレスから抑うつ等の臨床的問題に発展するリスクが高いこと（Heys et al., 2013）や，親の育児や精神的健康が子どもの育ちや適応に強く関与することから，養育支援が間接的に子どもの支援につながることが理由に挙げられる。しかしながら，発達障害の場合，親は子どもの障害を認識することが難しいという問題がある。これによって発達障害児をもつ親は，特に子どもが乳幼児期において，専門機関に援助を求めなかったり，一度は専門機関につながるものの，支援者の障害疑いの指摘を受け入れられずドロップアウトしてしまうという問題があり（山根，2010a），臨床現場においても対応に苦慮することがある。発達障害児をもつ親は専門機関への来談が遅れる傾向にあり，来談までの時期に強い不安や疲労，孤立感を経験しやすく危機的な状況に陥りやすい（Howlin & Asgharian, 1999；山根，2010a）。特に欧米よりも我が国ではこの来談の遅れが顕著であることから（山根, 2010b）、親が早期に支援につながるための方策を検討する必要がある。

このような発達障害児の親の心理はこれまで主に障害受容研究で検討されてきた。しかし，障害受容研究では障害受容や障害認識に関係する親の心理的過程を明らかにできることが期待できるが，援助を求められない親に対して支援の受け入れや来談を促進するためにどのようなアプローチが必要かについて具体的な知見を得にくいという限界がある（桑田・神尾，2004）　。

一方で，援助の求めを困難にする要因を検討し，より円滑な援助につながる知見を得ようとするものに援助要請研究がある。援助要請とは個人がどのように援助を利用するかを指し，被援助志向性と被援助行動の 2 つの下位概念からなる（水野・石隈，1999）。前者は個人が援助者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組みであり，後者は個人が実際に援助者に援助を求める行動を指す。発達障害児の親の援助要請に関する研究は乏しい現状だが，障害受容研究の知見に援助要請研究の枠組みを組み合わせることで，具体的な方策を提言できる知見を得ることが期待できる。

ところで，一般的に専門的な援助を求める前段階の行動としてインターネット検索行動が挙げられる。うつ病などの精神疾患を抱える者は，専門機関に援助を求める前にインターネットを利用してその病態や専門機関の情報を得ており，その情報取得やインターネット利用によってその後の援助要請や精神的健康が影響を受けていることが知られている（Sueki et al., 2014)。発達障害児の親の場合も同様のことが考えられるが，インターネット上には適切な情報だけでなく，発達障害に関する誤った情報や信憑性の低い民間療法を勧める情報も多く，親はこれらの情報を得て障害認識の葛藤が生じたり、時には援助を拒否したり障害を否定したりすることにつながる可能性も考えられる。このような発達障害児の親のインターネット検索行動は明らかにされておらず，インターネット検索行動によってどのような情報を取得し，障害認識がどのように影響を受けているかに着目することで，より早期の援助につながるインターネット情報の提示方法の知見が得られることが期待できる。

さらには，障害受容研究の知見から，発達障害児の親は相談する場所が分からないと感じることだけでなく，障害のレッテルを貼られることへの恐れや不安，支援者が自分の気持ちを理解してくれないかもしれない懸念などの意識が働くことで，相談機関への来談が抑制されている可能性が考えられる。このような親の意識を「援助要請困難感」として取り上げることで、発達障害児の親の援助要請を阻害する要因を検討することができるだろう。

そこで，本研究は発達障害児の親における専門機関来談前の援助要請を促進及び阻害する要因について，インターネット検索行動と援助要請困難感の観点から検討するものとする。

２．研究の目的

本研究は発達障害，特に自閉症スペクトラム障害（Autism spectrum disorders；ASD）児の親が相談機関の受診前にどのようなインターネット検索行動を行い，どのようなインターネット情報やサポートを得ているのかを明らかにすることを目的とする。また，インターネット検索行動がもたらす親の援助要請行動及び精神的健康への影響について検証する。具体的には以下の 4 点を目的とする。

(1)インターネット利用行動の実態解明

発達障害児の親が専門機関受診前に，子どもの様々な特異な特長や発達の遅れに気付いていることは明らかになっているが，それらの気付きから具体的にどのようなインターネット検索行動を行い，オンライン上のサポートを授受しているかは明らかになっていない。そのため上記の点について実態把握を行う。

(2)検索エンジンにおける発達障害関連用語の検索状況の実態解明

インターネット上で発達障害に関する情報や支援方法等の情報を手軽にかつ豊富に入手できるため，検索エンジンの利用は発達障害児の親の援助要請に影響を与えると思われる。そこでインターネット上の検索エンジンから特に自閉症に関する関連用語がどのように検索されているかを明らかにすることで，発達障害児の親の援助要請に関する基礎的資料を得ることを目的とする。

(3)インターネット上のサポート利用が親の援助要請及び精神的健康に与える影響明

ASD 児の親を対象とした短期縦断調査によって，インターネット上のサポート利用が親の援助要請および精神的健康にもたらす影響を検討する。

(4)援助要請困難感と関連要因の質的分析

ASD 児の親への半構造化面接によって，専門機関受診前に援助要請を思いとどまる意識や援助要請を阻害する要因を検証する。

３．研究の方法

(1)オンライン情報検索データからみる発達障害関連用語の検索状況

①検索語の選定

ASD 児の親が子どもの発達に初めて不安を感じた行動と状態（山根，2010）と，ASD の診断基準（DSM-Ⅳ）を参考に 125 語を選定した。そのうち 42 ヶ月以上データ取得が可能であった 37 語を分析に採用した。また，障害名として自閉症，広汎性発達障害，アスペルガー障害，アスペルガー症候群の 4 語を分析に使用した。

②データの収集

Google Trends を利用して，比較基準を「キーワード」，フィルタを「日本」「すべてのカテゴリ」「ウェブ検索」「2009 年 1 月から 2013 年 12 月まで」とした。検索語を「キーワード」に入力し，月別検索ボリュームを出力した。自閉症に関連する障害名 4 語とその障害名を 100 とした際の各々の検索語の相対的検索ボリュームを算出した。

(2)自閉症児の親のインターネット利用の実態把握

①調査協力者および調査手続き

インターネット調査会社が保有するモニターで障害のある子どもを持つ親 515 名を調査の対象とした。最終的に子どもが 18 歳以下，障害が不明確な回答，誤答が一つ以上あった回答，ASSQ 短縮版のカットオフ値を満たさない回答を除き，240 名を分析対象とした。

②調査内容

(a)障害を初めて疑った時期と専門機関に初めて相談した時期の子どもの年齢とオンライン情報検索の有無を尋ねた。また両時期の検索語については自由記述で回答を求めた。

(b)診断を受けた時期の子どもの年齢とその診断名を自由記述で回答を求めた。

(c)オンラインソーシャルサポート希求尺度は Reinke & Solheim (2015)の定義と末木（2012）のインターネット利用行動項目を参考に，情報的サポート希求と情緒的サポート希求を測定する項目を作成した。前者は子どもの障害や支援場所に関する検索行動とサイトの閲覧について 6 項目（情報の検索・閲覧行動），後者は匿名他者への相談行動について 3 項目（匿名他者への相談行動）からなる。

(3)発達障害児の親の援助要請促進におけるインターネット利用の関連性の検討

①調査協力者

インターネット調査会社が保有するモニターで障害のある子どもを持つ親 240 名を対象に第 1 回目の調査を行い（T1），その 6 ヵ月後に追跡調査（T2）を行った。

②調査内容

オンラインソーシャルサポート希求尺度（前述），援助要請行動（医療機関，専門機関），養育ストレッサー尺度（DDPSI；山根，2013），ソーシャルサポート尺度（医療機関，専門機関；山根，2013），ストレス反応（SRS-18；鈴木他，1997）であった。

(4)発達障害児の親の援助要請を阻む要因の探索的検討

①調査協力者および調査手続き

ASD 児の母親 10 名（38—52 歳，子どもの年齢は 8—18 歳）を対象に半構造化面接にて，専門機関や相談期間に相談する前の困難さについて語りを得た。

②語りの分析方法

KJ 法を参考に類似する意味内容に語りを分類した。

４．研究成果

(1)オンライン情報検索データからみる発達障害関連用語の検索状況

①自閉症等に対する各検索用語の相対的検索ボリューム

自閉症に関連する障害名を 100 とした際の検索語の相対的ボリュームの大きさを比較したところ，値の大きなものは「パニック」を除き比較的日常的な用語が挙げられた。値の小さいものとしては，乳幼児期に顕著にみられる自閉症の特徴に関連する用語が多くを占めた。このことから発達上で一般的に気付かれやすく，発達の遅れや ASD の特性とは区別しがたい範疇の遅れや他児との差異が相対的に多く検索されていることが示唆された。

②自閉症等の障害名と各検索用語との相互関係の検討

検索語間の相互関係と、検索語と障害名との関係を視覚化するために、計量的多次元尺度構成法（ALSCAL）をおこなった結果、2 軸を採用することが妥当と考えられた。各検索語の二次元上の布置から検索語は３つのグループに分類できると考えられた。グループ１は乳幼児期に子どもの発達上の問題として親に気づかれやすい特徴が含まれた。グループ２は，対人関係や学校園での問題に関する特徴が含まれた。障害名は自閉症，広汎性発達障害が含まれた。グループ３は，行動上の問題に関する特徴が分類された。このグループにはアスペルガー症候群/障害が含まれた。このことから，自閉症および広汎性発達障害とアスペルガー症候群/障害は区別さ

れて検索されていることが示唆された。また軸の解釈から自閉症に関する検索語は，「概念語－日常語」（縦軸）と「乳幼児期－児童期以降」（横軸）という 2 つの観点から理解することが可能であることが示唆された。相談機関への円滑なアクセスのためには，このような発達障害児の親の検索行動を踏まえた情報提示が求められるといえる。

(2)発達障害児の親のインターネット利用の実態把握

①診断前のオンライン検索の実態

障害を初めて疑った時期は平均して 3.31 歳(SD＝2.76)であり，この時期に 175 名(72.92%)がオンライン検索を行っていた。父母別では父親が 59 名(73.75%)，母親が 116 名(72.50%)であった。世代別にみると，20 代が 11 名(100%)，30 代が 57 名(75.00%)，40 代が 87 名(74.36%)，50 代が 20 名(57.14%)であった。χ^2 検定により有意な分布の偏りがみられ (χ^2 (3) = 8.84, p < .05)，残差分析の結果 50 代の検索行動が 5%水準で有意に少ないことが示された。検索語の内訳は，具体的な障害名が 129 名(73.71%)で最も多く，次いで行動・状態像が 89 名(50.86%)，発達・年齢が 18 名(10.29%)，療育・相談機関が 15 名(8.57%)であった。

次に相談機関に初めて相談した時期は平均して 4.11 歳(SD＝2.77)であった。この時期に 140 名(58.33%)がオンライン検索を行い，父母別では父親が 42 名(52.50%)，母親が 98 名（61.25%）であった。世代別では 20 代が 8 名(72.72%)，30 代が 51 名(67.11%)，40 代が 64 名(54.70%)，50 代が 17 名(48.57%)であった。検索語の内訳は具体的な障害名が 98 名(70.00%)で最も多く，次いで療育・相談機関が 46 名(32.86%)，行動・状態像が 38 名(27.14%)，発達・年齢が 10 名(5.43%)であった。

②オンライン情報やサポートの利用実態

オンライソーシャルサポート希求尺度の各項目の「ときどきあった」から「毎日あった」と回答した親の比率と各項目の平均値を算出した。情報の検索・閲覧行動では，支援場所の検索が 137 名(57.08%)，支援場所に関するサイトの閲覧が 134 名(55.83%)，相談場所の検索が 133 名(55.42%)，相談場所に関するサイトの閲覧が 130 名(54.17%)，子どもの障害の検索が 173 名(72.08%)，子どもの障害に関するサイトの閲覧が 166 名(69.17%)であった。匿名他者への相談行動では，自身のメンタルヘルスが 44 名(18.33%)，障害認識の共有が 40 名(16.67%)，子どもの障害が 53 名(22.08%)であった。

以上より，ASD 児の親の半数以上が障害や相談機関についてインターネットで情報を定期的に収集している実態が明らかになった。また特筆すべきこととして，約 2 割の親が子どもの障害や自身の精神的健康上の問題を匿名他者に開示し，相談している実態をみられた。これについては，オンライン上で情緒的サポートを得られる場を構築していくこと，現実の相談機関や医療機関につなげていく仕組みを築いていく必要性を示唆する。

(3)援助要請促進におけるインターネット利用の関連性の検討

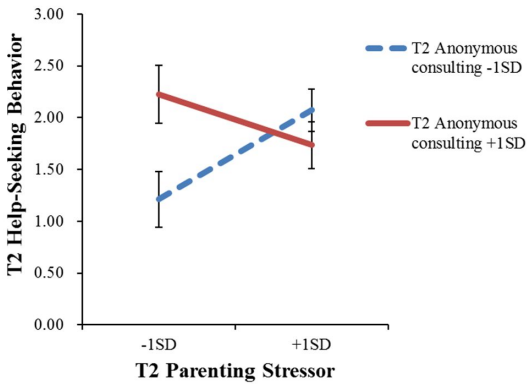
T2 時点の援助要請行動（医療機関および専門機関）を従属変数とした階層的重回帰分析による検討を行った。まずデモグラフィック変数を統制し（Step1），T1 時点の関連変数を投入し（Step2），T2 時点の予測変数とその交互作用項を順次投入した（Step3，4，5）。それぞれの従属変数の結果は以下の通りである。

①医療機関への援助要請行動

養育ストレッサーの変化が援助要請行動の変化と正の関連を示した。また，オンライン上の検索行動の変化が援助要請行動の変化と正の関連を示した。交互作用項は有意であったが，有意な説明率の上昇がみられなかった。このことから養育ストレッサーやオンライン検索行動が医療機関への援助要請行動を高めることが示された。

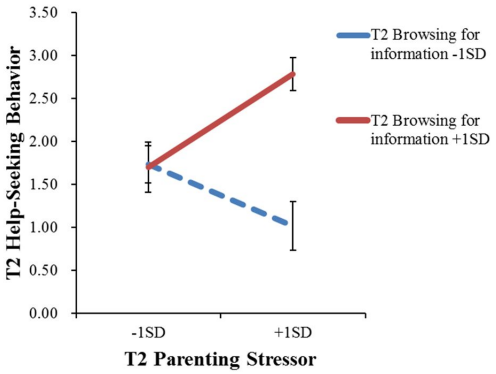
②専門機関への援助要請行動

医療機関と同様に，養育ストレッサーの変化とオンライン検索行動の変化が援助要請行動の変化と正の関連を示した。また養育ストレッサーとオンライン検索行動，養育ストレッサーと匿名他者への相談行動の交互作用項が有意であり，有意な説明率の上昇がみられた。そこで単純傾斜の検討を行ったところ，オンライン検索・閲覧行動情報の検索・閲覧行動が高い場合（＋1SD），養育ストレッサーが有意な正の効果（B＝.04，β＝.41，p＜.01）を示し，情報の検索・閲覧行動が低い場合（－1SD），養育ストレッサーが有意な負の効果を示した（B＝.02，β＝－.27，p＜.05 ）。このことから，養育ストレッサーの高さはオンライン上の検索や閲覧行動が高いときには援助要請行動を促すが，逆にオンライン上の検索や閲覧行動が低いときには援助要請行動が抑制されることが示唆された。



また匿名他者への相談行動が低い場合（－

1SD)，養育ストレッサーが有意な正の効果を示し（B=.03，β=.33，p<.05)，匿名他者への相談行動が高い場合（+1SD）は養育ストレッサーの効果は有意でなかった。このことから，匿名他者への相談行動が低い場合であれば，養育ストレッサーの高まりから相談行動につながるが，匿名他者への相談をよく利用している親は養育ストレッサーが高くなっても相談行動にはつながらないことが示唆された。



(4)オンライン上のサポートが精神的健康に与える影響

親の性別と年齢を統制した交差遅延効果モデルによって，オンラインソーシャルサポートが T2 の養育ストレッサーやストレス反応を予測するかを検証した。その結果，匿名他者への相談行動が情報の検索・閲覧行動を高め，ストレス反応を高めていた。一方で情報の検索・閲覧行動は養育ストレッサーやストレス反応と関連がみられなかった。なお，知覚されたソーシャルサポートは T2 のストレス反応を低下させていた。このことから，オンライン上の匿名他者への相談行動は養育ストレッサーやストレス反応を悪化させる可能性が示唆され，オンラインソーシャルサポートの精神的健康への効果は慎重に解釈する必要性，オンラインソーシャルサポートが有効であるためには条件（相談先との関係性，グループの凝集性等）が必要である可能性が考えられた。

(5)援助要請を阻む要因の探索的検討

①援助要請を困難にする要因

KJ 法の結果，10 のカテゴリが得られた。これらの結果から示唆されることとして，援助要請を阻害するものとしては以下のような点が考えられた。夫を始めとした周囲の声（個性である）や反対，自身の障害観とのギャップ，相談すべき内容なのかが分からない，相談機関から明確な指摘がなされないこと，援助要請先の情報の不足（e.g. 知らない，教えてもらえない）等が挙げられた。このことから，夫をはじめとして，「個性の範囲」という周囲の障害を否定する声や反対であったり，自分の障害というイメージと目の前の子どもの障害が一致しないことなど，一派的な障害観とのズレが障害認識を難しくさせることが考えられる。また，子どもに関する悩みや不安が相談機関に相談すべき水準のものなのかが判断がつかないことや，いざ相談をしても何も指摘をされないこと，そもそも援助要請先の情報を知らないことなどが挙げられており，相談機関側の情報発信や対応の問題も関与しているものと考えられた。

②援助要請を促進すると考えられる要因

専門機関に相談を行うに至った経緯を分析したところ，下記のようなカテゴリが得られた。度重なる周囲からの違和感の指摘，明確な障害の疑いの指摘（保健師，保育士，心理士など)，「つなぎ」の支援の場（親子教室，親の会，療育施設)，具体的な相談資源の情報提供周りから違和感，おかしいという指摘が繰り返されること，医師以外の専門家による障害疑いの指摘等である。また発達に不安を感じる親子のための教室や親の会など，療育に至るまでの中間的な支援の場や，援助要請先で具体性のある情報をもらうこともその後の援助要請につながることが示唆された。

(6)まとめと今後の課題

本研究では ASD 児の親のインターネット検索行動やその利用行動の実態を診断前と現在とで明らかにすることができた。また，現実の専門機関や医療機関への援助要請において，ストレッサーの高低によってインターネット上の情報検索行動の影響が異なることも示唆された。しかしながら，現実の相談機関への援助要請を困難にする親の体験と，インターネット利用行動との関連性については検討することができなかった。今後は現実やインターネット上の援助要請行動と障害認識との関わり合いについて検討していくことが必要である。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 山根隆宏，発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応過程に対する意味了解の影響，心理学研究，査読あり，86(4)，293-301，2015

〔学会発表〕（計 15 件）

① Yamane, T. & Yamaguchi, M. (2018). Effects of online social support on psychological stress response among parents of children with autism spectrum disorders. The 25th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioral Development, ゴールドコースト（オーストラリア）

② Taniguchi, A. & Yamane, T. (2018) Education student's attitude to Children with attention-deficit/ hyperactivity disorder: Relation of

Empathy. The 40th ISPA Conference, 東京成徳大学（東京都）

③ Yamane, T. & Taniguchi, A. (2018) Gender and age differences in trajectories of parenting-related stress among parents of children with autism. The 40th ISPA Conference, 東京成徳大学（東京都）

④ 山根隆宏, 発達障害を巡る親の個人的体験から現実とオンラインのソーシャルサポートへ，日本発達心理学会第 29 回大会自主シンポジウム「障害のある子どもをもつ親支援を再考する—ミクロ・メゾ・マクロの視点から—」，2018.3.25，東北大学（宮城県）谷口あや・山根隆宏・狗巻修司，青年前期における発達障害のある生徒と周囲生徒の関係—大学附属中等教育学校教員の視点から—，日本発達心理学会第 29 回大会，2018.3.23，東北大学（宮城県）

⑤ 山根隆宏, 青年期における発達障害者とその親の心理的課題，日本発達心理学会第 29 回大会発表自主シンポジウム「思春期から青年期にかけての多様な発達支援—当事者の声をもとに—」，2018.3.23，東北大学（宮城県）

⑥ 山西希美・山根隆宏，自閉症スペクトラム障害児・者をもつ親の障害認識過程（1）—夫婦の相互性に着目して—, 日本心理臨床学会第 36 回大会，2017.11.21，パシフィコ横浜（神奈川県）

⑦ 谷口あや・山根隆宏，発達障害のある生徒への捉え方に影響を及ぼした要因に関する検討，日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集, 610，2017.10.9，名古屋国際会議場（愛知県）

⑧ 山根隆宏，臨床実践・発達的観点からのコメント，日本教育心理学会第 59 回総会自主シンポジウム児童・青年の発達とメンタルヘルスに関する大規模縦断研究 いじめ，性別違和感，発達障害特性，インターネット依存の観点から, 56-57，2017.10.8，名古屋国際会議場（愛知県）

⑨ Yamane，T., Harada, S., & Yamaguchi, M. Effects of sense making and benefit finding in parenting children with autism, 18th European Conference on Developmental Psychology, 2017.9.1

⑩ 山根隆宏, 日本における自閉症児をもつ親の養育上の困難さ, 日本自閉症スペクトラム学会第 15 回研究大会自主シンポジウム「多文化から発達障害児を抱える親の育児ストレスを考える～よりよい支援や制度の構築に向けて～」，39 ，2016.8.28

⑪ Yamane, T. Predictors of help-seeking behavior in parents of children with autism spectrum disorders. The 31st International Congress of Psychology, 424, 2016.7.28，パシフィコ横浜（神奈川県）

⑫ 山根隆宏，発達障害児・者をもつ親の養育上の困難さ，日本 LD 学会第 24 回大会自主企画シンポジウム「高機能広汎性発達障害のある人への包括的・生涯的な支援プログラムを考える（3）～保護者支援のあり方を通して～」，2015.10.12，福岡国際会議場（福岡県）

⑬ 山根隆宏, 発達障害児をもつ親のストレッサー尺度の再検討.日本心理学会第 79 回大会，2015.9.24，名古屋国際会議場（愛知県）

⑭ 山根隆宏, 自閉症スペクトラム児をもつ親におけるインターネット上の援助要請に関する研究（1），日本心理臨床学会第 34 回秋期大会，2015.9.19，神戸国際会議場（兵庫県）

〔図書〕（計 1 件）

① 山根隆宏（2016）養育者は子どもの障害をどう受け止めていくか，下山晴彦・村瀬嘉代子・森岡正芳（編），必携発達障害支援ハンドブック　金剛出版

6．研究組織

(1)研究代表者

山根　隆宏（YAMANE，Takahiro）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
研究者番号：60644523

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

山西希美（YAMANISHI，Kimi）
谷口あや（TANIGUCHI，Aya）